

右岸用水事業は市制施行50年の
中で一番大きな事業だった

川合良樹市長



「木曽川右岸用水事業」の写真や資料を見ながら当時を振り返る堀川さんと川合市長

い苦しい事情がありましたね。地元の説明会で、畑にもかんがい設備が付けられますと説明しても、ほとんど理解していただけなかったように記憶しています。ただ、堀川さんらが、真つ先にかんがい設備を設置されましたね。当初は、モデル事業として取り組んでいたのだと記憶しています。堀川さん そうです。4ヘクタールほどの畑をモデル事業として、かんがい設備を設置しました。もつとも、私たちの所は、下流域にあたるため、当初右岸用水は来ていませんでした。そこで、右岸用水が来るまで、井戸水を利用していました。加工トマトを栽培したのが、かんがい設備を利用したハウス栽培の始まりでしたね。しかも、大手食品メーカーとの契約による受託栽培でしたから、当時としては、画期的なことでした。今思えば、先駆的なことだっただけに、よく地元の皆さんが協力してくれたと思いますよ。

川合市長 その後、このモデル事業の成功を契機に、畑のかんがい設備が下米田、加茂野へと広がりました。



川合良樹市長
昭和53年から4年間、市木曽川右岸用水土地改良区事務局長として事業に携わる

「もし、右岸用水事業がなかったら、この地方はどうなったでしょう？」

堀川さん 右岸用水がなかったら、大打撃を受けるどころか、今の美濃加茂の農業は、なかったと思いますよ。最後に、私は、水を大切にしたいですね。

川合市長 右岸用水の恩恵は、農業用水のみならず、工業用水、水道用水としても大変恩恵を受けています。今の美濃加茂市発展の基盤となったのが、この右岸用水といっても過言ではないと思います。そういった面で、市制施行50年の中で最も大きな出来事だったといえます。先人の先見の明にあらためて感謝するとともに、これから50年後の美濃加茂市に誇れるようなまちづくりを心掛けることが必要だと思います。

◎ 対談

木曽川右岸用水
事業を振り返る

建設当時から「木曽川右岸用水事業」にかかわってきた、堀川芳郎さんと川合良樹市長に、思い出や苦労したことなどについて語っていただきました。

右岸用水がなかったら
今の美濃加茂の農業はなかった

堀川芳郎さん



蜂屋調整池で「木曽川右岸用水事業」の思い出を語り合う堀川さんと川合市長

「木曽川右岸用水事業」で、まず思い浮かべられることは？

川合市長 私は、「木曽川右岸用水事業」は、市制施行50年の中で、当市にとって一番大きな事業だったと思います。この事業が完成する前までは、昔からの伊深町の天王用水と下米田地内を流れる米田用水、それに森山町から西町まで流れる森山用水しかありませんでした。山之上地区や蜂屋地区のほとんどが、ため池に頼るしかありませんでした。しかも、場所によつてはため池も小さく、地元の人は、農業用の水だけでなく、飲み水にしても大変苦労されたと思います。水の確保ができたことは、本当にうれしかったですね。

堀川さん 地元の蜂屋川は、水量があまりなく田植えの時期になると、周辺

の各地で必ずといっていいほど水争いが起きていました。この右岸用水事業の話を聞いた時は、夢のような話でした。

川合市長 伊深地区や三和地区は川浦川などの水源に恵まれていましたからね。

堀川さん 覚えがあるのは、昔、干ばつで水田が干上がり、硬い土にくいので穴を掘って苗を植えたことがありました。田植え時に、水がないと本当に苦労しました。

川合市長 この事業は、確か岸東八郎さんが市長の当時、具体的な計画が始まり、土地改良に関する説明会が各地で開かれたと思います。ただ、当時農業による現金収入はあまりなかった時代であり、農家の負担が一体どれくらいになるかで、関係者は苦労された

と聞いています。

堀川さん この事業が始まったころは、美濃加茂の農業は大きく変わろうとしていました。昭和40年代はトマトやキュウリなどの施設野菜栽培が盛んになり、耕地整理・機械化などの農業構造改善事業がスタートした反面、昭和50年代になると米の余剰などによる減反政策など、農業を取り巻く環境は大きく変化したときでもありましたね。

川合市長 国営事業として実施するには、3,000ヘクタール以上の受益地面積がなければ認可されなかったため、堀川さんらの土地改良の役員さんは苦労されましたね。なんとか、畑も含めて3,533ヘクタールの受益地を見込みました。受益地面積を確保するには畑も含めなければならな



堀川芳郎さん（蜂屋町）
木曽川右岸用水事業蜂屋工区の副工区長として事業に携わられました